

262 骨シンチグラムからみた骨髄炎の経過観察

慈恵医大 整形外科

○ 大森薫雄, 伊丹康人, 吉田宗彦, 沢井博司

化膿性骨髄炎は整形外科領域における代表的感染症であり, しばしば慢性化し, 再発, 再燃を繰り返す憂慮すべき疾患である。

従来骨髄炎の経過観察にさいしては, 局所症状の消失とともに, X線写真上の骨病巣消失, 赤沈値の正常化などが治療打ち切りの参考とされてきたが, その病勢の把握と, 治癒しているか否かの判定がもっとも困難な問題となっている。演者らはすでに, 第10回本総会において骨スキニングが骨髄炎の病勢判定および臨床治癒判定に極めて有用であることを報告した。

今回は慢性化膿性骨髄炎で治療中の患者について術前術後の骨シンチグラムをとり, 経過観察をおこなったので, 症例を供覧するとともに, 予後評価について検討した結果を報告する。

方法および対象; 症例は骨髄炎で手術療法と抗生物質の連続投与によって, 症状が消失したのち, 再発再燃を防止する目的で間欠的投与方法をおこなって経過観察中の28例である。経過観察期間は最短6ヶ月, 最長5年で骨スキニングは原則として術前, 術後1ヶ月, 6ヶ月, 1年および2年, 3年と検査をおこなった。また同時におこなった臨床検査成績と比較した。

結果; 限局した病巣をもった骨髄炎では, 臨床症状およびX線とともに, 骨シンチグラム所見が早期から変化がみられた。

これに反し, X線上広範な骨硬化をきたしている症例では, 臨床症状および臨床検査所見が正常化しても骨シンチグラムで集積の減少がみられないものがあった。

しかし, ほとんどの症例で, 骨シンチグラムで術前強い集積をみたものが, 術後病巣の限局化と集積の減少がみられ, 同時に起こった臨床検査所見でも著しい改善が認められ, 経過がよく一致した。以上のことから, 骨髄炎の経過観察に付きわめて有効な検査法として応用できる。

263 血友病性骨関節症における全身骨シンチグラムの臨床的意義

東医大 整形外科

○ 渡辺謙二, 伊藤真綱, 三浦幸雄

同 放射線科

村山弘泰, 岡本十二郎

同 臨床病理

藤巻道男

目的; 近年血液凝固学の進歩発展により血友病患者の延命効果があがっている。しかし, 一方ではそれに付随する血友病性骨関節症も増加しており, 頻回の関節内出血を繰り返して, ついには重篤な関節障害をひきおこす点で整形外科的にも大きな問題として残されている。しかしこの多発性関節障害をひきおこす本疾患に対して全身骨シンチグラムを応用した系統的検査の報告は本邦では未だ行なわれていない。我々は血友病患者の全身骨シンチグラムによる検査を行っており, その臨床的意義を検討したので報告する。

方法; 全身骨シンチグラフィは^{99m}TcM P 10~20 mCiを静注し, 3時間後にPhogamma Hp型全身骨シンチカメラを用い検査した。

症例は血友病16症例で年齢が11才~50才である。その全例が血友病Aである。本症例の48関節を対象にそのシンチグラムを検討した。さらに臨床所見として, 関節症状および関節可動域, 既往における出血頻度, 出血時期等とともに比較検討し, X線所見としてDe PalmaのI度~IV度の分類に従いX線像と対比検討した。さらに血液生化学所見, A H G投与状態における骨シンチグラムの対比を行って血友病性骨関節症における診断的意義を検討した。

結果; 一般に本例には多関節部にシンチ陽性例を示すものが多いが, その判定にあたり年齢の特長として, 若年者には関節変形が軽度でも強い集積のある例もあり各関節の集積陽性の判定にはParameterを用いて詳細な検討が必要である。一方成人~老年の場合は骨関節変形がやや進行している例が多く, 集積像が出血性関節炎か, 骨関節症由来のものか判定が必要である。各関節別の骨シンチ陽性例は膝関節が最も多く, 次いで肘, 足, 股関節の順に認めた。臨床所見の中で関節運動障害を伴うもの78%に集積陽性を認めた。X線所見と集積像の関係では一致をみたもの82%で, 陽性例はDe PalmaのIV度に属するものが大多数である。一方IV度で, 陰性例のものもあるが一般にX線所見と相関関係にあると言える。又, 既往における出血頻度は出血回数が多く, 其の間隔が短い関節症, 多くの陽性例を認めた。X線所見が軽度で, シンチ陽性例は関節内出血や骨関節症進展等が示唆されるものとして重視される。以上, 血友病性骨関節症に対する全身骨シンチグラムの有用性を多角的に検討した。